

季刊
葦牙

ASHIKABE

一九八八年

冬

第10号目次

目次デザイン・斎藤茂男
本文目次カワトウのきしげる

小説

連載(第一回) **中庸のとき**

中里 喜昭 6

ハロウイーン

樋口今日子 38

記憶

磯野 宏至 57

談 鼎

◆ **女の現場から考える**

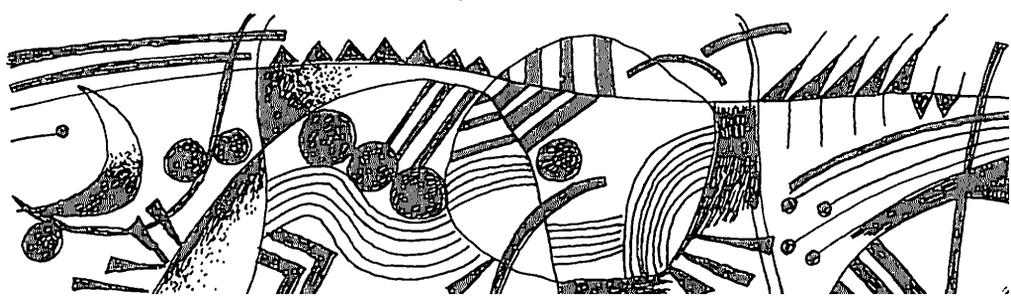
愛し・働き・育てる

浅野 富美枝
黒田 知恵子
やぶがみゆみよ 90

あしがび

日本が「社会主義」と映る時代——
「ジャパメリカ」
発見の旅から

加藤 哲郎 116



やぶかみ 黒田さんのエッセイ集にありましたよね、「親の点、死なれたとたんに甘くなり」。

（「ここがロドゥスだ。ここで跳べ」）

浅野 今日、現代日本の女性と家族が抱えている問題を、高所から論評するのではなく、一人一人の個人的な体験のなかから掘り起こそうということだったわけですが、予定していたテーマのうち、生活をめぐる諸問題を中心に話が進みました。話し合いのなかで改めて感じたことは、女性が抱えている問題というのは、女性だけの問題なのではなく、日本の歴史と現実社会が抱えている問題の一環に他ならないということ。女性抑圧の問題にしても、子育てや家族の問題にしても、さらには男と女の関係の問題にしても、根本にあるのは労働と生活の問題であり、同時に日本の「社会化」「近代化」の問題であって、本来は男と女共同の問題であると同時に社会の問題であるはずなのに、それが子育てと生活という形で現象した場合には女性が一手に問題を請負っているところがみられる。この請負主義を克服し、本来の問題の所在のところで闘いの土俵を組まないと問題の本当の解決は見られないのではないか、したがって当然のことながら女だけで世界が変えられるわけではないことを感じました。

女性と家族をめぐる問題として現象していることは結局のところ、戦前の古い共同体が解体され、そこで担われていた

諸機能を担う場、つまり新しい共同体・新しい社会が戦後資本主義の展開のなかで依然として構築されていないところで生じている問題であると思われれます。さまざまな分野とレベルで新しい共同体・新しい社会を建設する課題、それに伴った現代民主主義を創出する課題は、今日益々重要になっています。その意味でも女性と家族が抱えている問題が社会の他の問題とどのように連関しているか、このことについての正確な認識が何よりも重要ではないかと思われれます。

発言にもありましたように、今日の家族は、家族の古い形態の解体と新しい形態の難産の狭間で多様化しています。そして私たち女性の多くは、この家族という「現場」に真正面から立ち向かい、それがつきつくるさまざまな問題に苦悩しつつ、これでよいのかと絶えず自己に問いかけながら働き、子を育て、生きています。「ここがロドゥスだ。ここで跳べ」という言葉がありますが、私たちにとっての「現場」、跳べべき「ロドゥス島」とは、何よりも個々の家族であり、そして職場であり、地域社会であり、さらには日本であり、この地球です。私たちが立っている「ロドゥス」はそれぞれ少しずつ違いかもしれませんが、そこで跳ぼうとしている姿勢は共通のものでした。この姿勢をもってさらに広い世界へ撃つてたいと思います。今日の話し合いでは、とりわけ労働現場の女性が抱えている問題や女性の政治的諸権利の問題などが十分語られず、残念でしたが、それらについては別の機会に深めあうことにしまして、今日はこのへんで終わりにしたいと思います。

